年頭の御挨拶

辰巳会会長　鈴木治雄

皆様　新年明けましておめでとうございます。

平成十六年の念頭に当たりまして、色々と考えてみたいと思います。このところ最近の世界情勢は人為的にも自然的にも悪い条件が増えてきました。人為的には各国の欲望が多発してきた事と、宗教の争いが段々表面化してきて自分達の宗教以外は他を排除する方向に進んできた様に思えます。ニューヨークの大きなテロ事件、これに端を発したアフガニスタンの問題、イラクの戦争等、互いに話し合う暇も無く武器に訴えて物事の解決を図るやり方、これでは世界の平和を図る事は不可能であり、又自然界の色々の出来事は将来食料問題を引き起こす原因となる事は必至で、ますます住みにくい世界となってくるでしょう。

わが国も安閑としていられない事態となってきつつあります。

とにかく、政治を司る人達が現状を良く見てどうすれば現在の日本がうまく進んで行けるのかを見極めてくれない限り、日本の立つ瀬はありません。政治に携わる人達に何とかして下さいと頼る以外手の打ち様のない国民として、大きな危機感を感じながらも様子を見守る以外ありません。

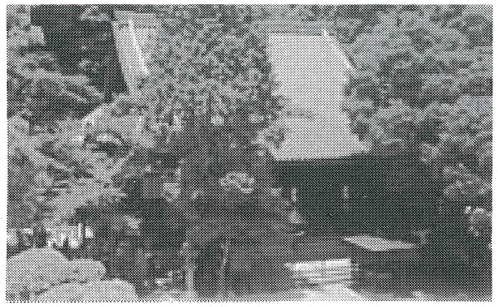
どうか皆様も政治を見守りながら元気に過ごしましょう。

全国大会報告

平成十五年五月二十二日(木)／於：寿楼　臨水亭

今年の全国大会は、初めてとなります神戸市須磨区の「寿楼　臨水亭」にて天候に恵まれ、昨年より出席者が少なかったことは残念でありますが、盛会に開催されました。

当会場は、源平の一の谷合戦で敗れた平家の平敦盛公ゆかりのお寺である須磨寺に隣接しています。出席された方の中には、早目に到着されて須磨寺の美しい池のほとりから、境内の庭園、旧跡を思い思いに散策され、大会前のひと時を過ごされました。



須磨寺　本堂

正午より柳田幹事の司会のもとに、安東幹事長の開会の辞で始まり、本大会の案内を送付しました約半数の出席となり、また、先に開催された東京支部の新年例会では元日商岩井会長の安武様が、辰巳会の支援を続ける心強いお話があったことを披露されました。

引き続いて、鈴木会長の挨拶があり、辰巳会発会当時は約一七〇名の出席があり、それから四〇年が過ぎて、その間に多くの方が故人になられて会員数も減少し、本日の出席者数になっていることも止む得ないことでありますが、この先も辰巳会をしっかり堅持し、運んでいく言葉がありました。また、会長ご夫妻が今年ダイヤモンド婚式を迎えられ、辰巳会からの祝意にお礼を述べられました。

次に、松下幹事の会務報告があり、五月八日祥龍寺において昨年中に故人となられた五名の方の法要を幹事一

同参列して行われ、これによって、同寺に合祀されている物故者は一、二〇〇名になられたことの報告がありました。ここで、これ等物故者のご冥福を祈り、一同で黙祷を捧げました。

宴に入り、神戸から関東に住居を移された横田元幹事長の発声で乾杯の音頭をとられ、会食となりました。

宴が進む中でスピーチを頂き、最初に小原秀吉様が健康診断を受けた際に、医療機器で受けた激しい衝撃音に悩まされたことからサーズの話となり、北支那、インドネシアに出征し戦争の穴倉での体験談をされました。続いて太陽鉱工の鈴木社長は同社グループ会社の業況、日商岩井とニチメンとの統合について、また世界情勢の動向のお話がありました。

次に、鈴木商店について深い造詣をお持ちのＮＨＫ大塚融様が、経済史の視点から世界・日本経済を考察された興味深い話をされ、その上で今日の日本政府の経済政策について批評を述べられました。

スピーチの最後として、この四月に六八才で初の相生市会議員になられた月岡定康様がその志を述べられ、また兵庫県人からは傑出した政治家を輩出していることを、その人物を挙げられてお話されました。

いつも宴を盛り上げられ、恒例になりました金子孝蔵様の小唄の披露があって、宴もそろそろ終わりの時間が迫り、楠瀬幹事の閉会の辞のあと全員で記念写真を撮り、大会は盛会のうちに終了しました。

全国大会　会食の風景

平成十五年度　全国大会式次第

平成十五年五月二十二日（木）
寿楼臨水亭

司会進行役　柳田　本部幹事

一、開会の辞　安東　幹事長
一、会長挨拶　鈴木　会長
一、会務報告　松下　幹事

宴

一、乾杯　楠瀬　本部幹事

テーブルスピーチ

一、閉会の辞

以上

平成十五年度　全国大会出席者名簿

（敬称略）

平成十五年五月二十二日（木）
寿楼臨水亭

安東　浄　東條佳子　福井崇子
安東恒子　楠瀬正明　松下重男
今村三郎　鈴木治雄　柳田辰巳
大塚　融　鈴木一誠　横田周作
小野晶子　鈴木孝子　横田よしこ
小原秀吉　須藤欽吾（事務局）
金子孝蔵　月岡定康　金野和夫
金子ソメエ　月岡昭子　中谷尚美
金子　峻　坂東みどり（以上二十七名）
金子泰　武藤　秋

辰巳会だより

本部 新年例会

平成十五年度 辰巳会
新年例会御出席者名簿
平成十五年一月十七日(金)
於・神戸「第一樓」
（敬称略）

足立せつ	高畑美紀
安東　浄	坂東みどり
安東恒子	武藤　秋
今村三郎	平高輝男
小野晶子	南条　亮
小原秀吉	牧　冬彦
金子孝蔵	松下重男
金子ソメエ	宮永悠紀雄
金子　峻	柳田辰巳
東條佳子	（事務局）
楠瀬正明	金野和夫
鈴木治雄	中谷尚美
高畑宗一	以上二十四名

今年の本部新年例会は、一月十七日に昨年と同じ所の神戸三宮の「第一樓」で開かれました。第一樓は神戸の中華料理店では老舗です。

鈴木会長のご挨拶では、今から八年前の今日、阪神淡路大震災が発生した日であり、当時同日に新年例会を予定していましたが、今日のこの同じ時間帯に発生していたらと思うと…、今日皆さんと元気でご一緒できるのは、辰巳会の諸先輩がお守り下さったおかげとのお話しをされました。

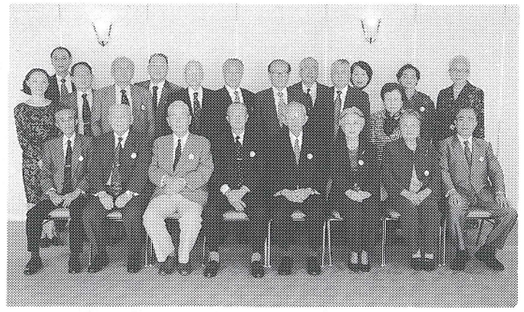
金子孝蔵様の乾杯のご発声で宴会が始まり、牧冬彦様のスピーチでは鈴木商店について、文学論からのお話をされました。

会場和気あいあいの中で、予定の時間も過ぎ、次の全国大会での再会を約束して散会となりました。

本部 秋季例会

平成十五年十月二十二日（水）、秋季例会がJR新神戸駅に近い「新神戸オリエンタルホテル」で開催された。

宴会場である当ホテル内三十四階の「オリオン」からは、当ホテル自体が山手に立地していることもあり、神戸市街、ポートアイランドは無論のこと大阪湾が見渡せる、すこぶる眺望良き所で宴開始前のひと時、眼下の景色に見とられる。当ホテル低層階から地階には、衣料品店、レストラン等の様々な店が並び、老若男女で賑わっていました。近くには、「夢風船」の名で知られる可愛いゴンドラのロープウェイで六甲山中腹に降り立てば、そこには各種ハーブの香りが漂い心を和ますハーブ園、一度は訪れても。



正午、柳田幹事の司会で始まり、鈴木会長のご挨拶では些か少なかった全国大会には、多くの方々の出席を希望されるお話がありました。続いて、大谷一二氏のご発声で、辰巳会の継続と会員皆様の健勝を祈念し一同乾杯。

会食に入り、今日の料理は創業が大阪であった「なだ万」の料理。

平成十五年度 辰巳会
秋季例会御出席者名簿
平成十五年十月二十二日(水)
新神戸オリエンタルホテル「オリオン」
（敬称略）

安東　浄	高畑美紀
安東恒子	月岡定康
大谷一二	坂東みどり
大谷淳子	武藤　秋
大塚　融	松下重男
小原秀吉	宮永悠紀雄
金子孝蔵	森　泰助
金子ソメエ	柳田辰巳
金子　峻	（事務局）
楠瀬正明	金野和夫
鈴木治雄	中谷尚美
高畑宗一	以上二十二名

栗、柿、銀杏、松茸など、秋の味覚のご馳走に堪能する。

宴も進み、小原秀吉氏のスピーチでは、北朝鮮の在留日本人女性の望郷の念と拉致問題、戦前に幼くしての中国渡航のことなど、心のこもったお話でした。また、安東幹事長のスピーチで、北朝鮮は人種爆弾をつくり、それも白人を攻撃対象ということで、驚かされるお話でした。大塚融氏は、金子直吉翁にまつわる話、また月岡定康氏がシベリヤ抑留者の手記に言霊（霊魂）が存在したことの話でした。

料理も最後のデザートを食し、予定の時間も迫り、楠瀬幹事より閉会の挨拶で例会はお開きとなる。出席者一同の記念撮影を終えて、お土産に「ハーブケーキ」を頂き、もう一度会場から神戸市街の眺望を脳裏に留め、階下へ向けて歩を運ぶ。

（K・K記）

東京支部 新年例会

今年はひつじ年。一回り前の平成三年は日本の経済がピークに達し、バブルの破裂が始まった年とされていますので、改めて今の不況の長さに驚きます。今年は更にイラク、北朝鮮などの地勢的リスクも加わり、このところ一向に景気のよい話は聞かれず、忍耐と辛抱の年になるというのが専らのようです。

そんな中、東京支部の新年例会が一月二十三日開かれました。会場は東京名所、赤レンガの東京駅駅舎内にある『東京ステーションホテル』で、その設営には親会社であるJR東日本の相談役でいらっしゃる住田正二様に大変お世話になりました。このホテルの建物は九十年に近い長い歴史を持ち、我が国の重要な文化財の一つとなっております。また、このホテルの何部屋かを全盛期の鈴木商店が年間借切って使っていたそうで辰巳会にとっても縁の深いところです。会場の『松の間』に入ると、立派なシャンデリアに照らされた会場の一角にはいつものように『かね辰』の暖簾が飾りつけられていました。定刻少し前に全員の出席が確認されたところで、その暖簾の前で記念の写真を撮ってもらいました。

全員がテーブルに着席し、まず辰巳会の物故された方々に黙祷を捧げました。続いて支部長の荒木正雄様がお立ちになり、ご挨拶のあと今回初めて例会に出席された安武史郎様（日商岩井会長）を紹介され、安武様は『鈴木商店にご縁のある方々がこのようにお集まりになるのは素晴らしいことだ。日商岩井はこの四月にニチメンと経営統合し、新たな形で再スタートするが、数々の新しい事業を自ら起こし立派に育てた鈴木商店の起業家精神をしっかり受け継いで、是非ともこの経営統合を成功させたい』などと挨拶されました。

住田様がご用意になったシャンペンが各参加者のグラスに注がれ、木村隆昭様の力強いご発声で一同が乾杯し、会食がはじまりました。会食の合間に住田様から『このホテルは歴史のある建物で、近く建て直すことになっており、その際、昭和二十年の空襲で失った三階部分を復元し、内装もできるだけ昔の雰囲気を残すように工夫することになっていること。ご自身が小学生だった頃、東京で洋食といえばここと上野の精養軒で、よく連れてきてもらったこと。また、このホテルの常連客には金子直吉翁などの実業家や政治家のほか、川端康成、内田百聞、松本清張などの作家の方々がおられ、松本清張氏の場合、名作「点と線」のトリックはこのホテルの部屋から東京駅を発着する列車を跳めている間に考え付いたものと伝えられている』など興味深いお話をされました。

その後、話は住田様を中心に殆どの方が加わる形で、日本の政治や経済から教育また最近の世想についてなど多岐にわたるものに及びました。特に記憶に残るものを挙げますと、このところ日本の財政赤字が増え続けているのは子孫に借金のつけを残すことになるので、いま思い切った対策が必要であること、いずれこの問題の解決の一環として消費税の引き上げなど増税が不可避となるが、その前にまず議員から役人まで大幅に人数を減らすことや、予算の抜本的な見直しが必要であること。また道路四公団民営化推進委員会で激しい議論を経た提案などがこれからどのように実行に移されるかについて、国民はこれまで以上に関心を持って監視していかなければならない等でした。

瞬く間に閉会の時となり、幹事より例年通り帝人および日本発条のご厚意で出席者全員に記念の御品をいただいたこと、また日商岩井からもいつも通り協賛金をいただいたとの披露がありました。散会する前に、住田様のご手配でホテルの部屋を見学させていただくことになりました。最初に金子直吉翁が使っていた部屋に案内されましたが、それは二階の東の奥にあり、当時はスィートルームであったものを今は分割しシングルとして使われています。その窓いっぱいに皇居外苑のお堀端が眺められました。往事この部屋には直吉翁が上京されるたびに次から次へと来客が訪れ、大変賑やかであったと伝えられています。続いて内田百聞の部屋、松本清張の部屋も見せていただきました。それぞれ感慨深いものがありました。

記念品と福砂屋のカステラをお土産にいただき、ホテルの正面玄関を出ますと、目の前に昨年秋に新装オープンした地上三十六階の丸ビルが聳え立っていました。そしてその中へ東京駅から吐き出されたたくさんの人々がせわしげに吸い込まれて行きました。今年は新橋近くの汐溜と六本木にもっと大規模でもっと高層の商業ビルがオープンすることになっているそうです。丸ビルを見ていると、どこが不景気なものか、日本は活力にあふれているではないかと思えてきました。

今年こそ、よい年になって欲しいものです。辰巳会関係の各社のご発展を心から祈りつつ、帰途につきました。

（Y・A記）

平成十五年度 辰巳会
東京支部 新年例会参加者

平成十五年一月二十三日㈭
東京ステーションホテル・松の間
（順不同・敬称略）

荒木正雄　池田宗吉
安東浄　西川明子
木村隆昭　森美子
建部清也　安武史郎
建部和子　長崎潤一郎
武岡輝彦　荒木義弘
長橋忠男
住田正二

計十四名

東京支部 春の例会

平成十五年度 辰巳会
東京支部 春の例会参加者

平成十五年六月五日㈭
世田谷美術館レストラン・ル・ジャルダン
（順不同・敬称略）

荒木正雄　速水優
安東浄　ご夫人
木村隆昭　西川明子
武岡輝彦　森美子
長橋忠男　荒木義弘

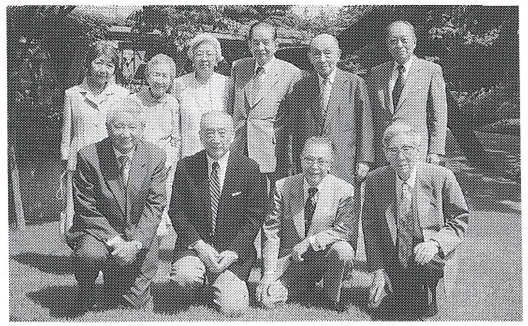
計十名

前日の雨がまるでうそだったように晴れ上がった行楽日和の下で、六月五日の辰巳会の春の例会が開催されました。このところの例会は都心のホテルなどでの会食が続いていましたが、今回は少し違って、美術館で絵画鑑賞という趣向です。場所は世田谷美術館。甲賀駅から徒歩十五分で行ける砧公園の北西の一角に三十年ほど前に建てられたこの美術館では、いつも意欲的な展覧会が開かれており、またそこに隣接するレストランの評判が大変よろしいと、ご近所にお住まいで、当会の幹事をして下さっている森美子様のご推薦によるものでした。

集合の場所はそのレストランで名前は〝ル・ジャルダン〟。公園の見える側は全てガラス戸という造りになっていて、お部屋の中は大変明るく、清潔感でいっぱい、またガラス戸越しに見えるよく手入れされた芝生と木立の緑が、折りからの爽やかな日差しに映えて本当に鮮やかでした。近くに桜の大木も見え、花見時にはさぞ見事であろうと思われました。今回は十名のご参加で定刻前に皆様お揃いになり、会食が始まりました。

まず荒木支部長から開会のご挨拶に続き、日銀総裁という重責を終えられたばかりの速水優様が乾杯のご発声をお引き受けになり〝同友会代表幹事に引き続いて日銀総裁を任期一杯の五年間、無事努め終えてホットしている。厳しい経済状況であるが、後任に最適任者を得たので、安心してお任せできる。辰巳会がこのように続いているのは素晴らしいことで、今後ますます盛んになりますように〟など述べられた後、乾杯のご発声をなさいました。

料理が運ばれ、オードブルからコンソメスープ、お魚、ステーキと進む中、荒木支部長や安東幹事長が日本経済の状況について質問をされますと、速水様は次のようにお答えになりました。〝今の不況の元は八十年代に米国や英国が構造改革を断行した時に日本は長く好景気が続き―それがバブルになってしまったのだが―そのため改革が遅れたことにある。



従って今、苦しくても構造改革をやり抜かなければ経済はよくならない。〟〝不況脱出の手段として円を安くせよとよくいわれたが、円を売ることは国を売ることと同じであり避けるべきと考えた。また円売り介入をしても巨大な為替市場中で効果は限られる。〟〝インフレターゲットの論にも賛成できない。日本は米国一辺倒のきらいがあるので、もう少し英国やドイツ、フランスなどのこともよく研究すべきである〟等など。また、幼少のころ神戸近辺でお育ちの速水様、武岡様、安東様などが昔のご近所の思い出や、学校の話、趣味の話から軍隊（海軍）での経験など楽しく語り合われました。デザートも終わった頃合いを見て、皆さん外の芝生に出られ、一面の新緑に陽光がさんさんと注ぐなか、集まって記念の写真を撮ってもら

いました。

続いて絵画鑑賞です。美術館はレストランと渡り廊下で結ばれていました。当日の企画は『黙示録―絹川幸二展』で、世田谷在住の洋画家でイタリアで壁画を勉強され日本の古墳の壁画の修復作業にも携われた絹谷画伯の個展でした。画伯は小磯良平氏に師事された方だそうで、小磯画伯と聞くとすぐあの山高帽をかぶった金子直吉翁の肖像画が思い出されましたが、個展の作品は小磯風とは全く違って、数枚のデッサンを除くと、写実より観念に重きを置いた思想性のある大作揃いでした。作品の多くは画面からはみ出さんばかりの大胆な構図に赤、黄色、黒などの原色が豊かに加えられ、真に迫力にあふれたものでした。一時間半ほどで展覧会を観終えて、再びレストラン入り口に集合し、お土産にクッキーを頂戴して解散となりました。天候に恵まれ、素晴らしい環境の中、お陰さまで大変楽しく過ごせていただきました。

次は秋の例会となりますが、また皆様とお会いできるのを楽しみに致しております。（Y・K記）

東京支部 秋の例会

十月三十日（木）東京支部秋の例会、雲一つない秋晴れ、九月下旬から十月上旬並みのポカポカ陽気に恵まれ、昨年新しく高層ビルに生まれ変わった丸ビル三十六階の「福臨門魚翅海鮮酒家」丸ビル店で開催されました。

丸の内ビジネス街の中心として親しまれて来た旧丸ビルも三十六階建ての高層ビルに変容し、国際的なビジネスのオフィスビル、そしてショッピングやグルメ、カルチャー、エンターテイメントが楽しめる新しい丸の内スタイルになりました。直通エレベーターで三十六階の同店の程よい広さの明るい個室に案内される。部屋からは正面に坂下門、皇居のお濠と、ところどころ僅かに色づいている森が眼前に展がり、東御苑、皇居外苑、宮内庁の屋根等を望み、その向うには新宿の高層ビル街、更に遠くには丹沢の山並みがうっすらと見える。この皇居の静寂の森を眼前にして戦争や報復テロや紛争の続く世界に早く平和が訪れないものだろうかと想う。

正午前に参加十五名（柳田辰巳さん、横田周作さんの奥様が東京の例会に初めて参加された）全員がお揃いになり二つの丸テーブルに分かれて着席、荒木義弘幹事の進行で先ず荒木正雄支部長のご挨拶の後神戸から御参加の柳田辰巳さんの自己紹介があり、武岡さんのご発声で乾杯、懇親の宴となりました。評判の広東料理の数々が次々と運ばれ、お酒を酌み交わし、料理を堪能しながら和やかな雰囲気で歓談、もろもろの話題で賑やかな一刻となりました。話も弾むうちに予定の二時となり荒木幹事よりの閉会の言葉でお開きとなり、福臨門の饅頭をお土産にいただき再会を約して解散となりました。

この日の宴席は二つの丸テーブルに分散着席だったのでそれぞれのテーブル毎での歓談となりました。全員同席の方がよかったかなと思いました。

企画から店との折渉等すべて荒木幹事にお世話になりました。楽しい一日でした。

平成十五年度 辰巳会
東京支部 秋の例会参加者

平成十五年十月三十日㈭
於・丸ビル 福臨門酒家
（順不同・敬称略）

荒木正雄　柳田辰巳
安東浄　西川明子
木村隆昭　森美子
武岡輝彦　横田周作
長橋忠男　横田よしこ
池田宗吉　移川京子
安武史郎　荒木義弘
住田正二

参加者十五名

辰巳会 会員だより

母、金子貞子を想う

東條佳子

自然を愛し、野に咲く草花を慈しみ「人には裏切られることもあるが、草花は手を掛ければ掛けるだけのことを返してくれる」と根気良く手入れをし、又、とても勉強家で、いつ草花の名前を聞いても、即、名前が返ってくるのには、いつも我母は「凄い！」と感心しておりました。

こんなに早く別れが来るなんて思っても見なかったので、昨年九月に京都の山草会の仲間の方と一緒に、信州の野麦峠へ行くのを誘われたのですが、九月末で定年退職する予定でしたので、十月からは母とのんびり出来ると思い、同行せず……旅行から帰ってきて少し、しんどいと言って肺炎で入院、本人は、まだまだ元気で旅行を楽しむつもりで、病床の中で看護師さんに「退院の時持って帰る」と言って代筆してもらった「笹の葉に　命もらいし　ありがたき」の句を残し、……集中治療室に入ったまま四十日程の入院で、何も話さないままに、あっというまに天国へ召され、未だに信じられず、電話をすると元気な声が返って来そうな毎日を過ごしております。母らしく集中治療室での入院だったので、周りの人の事を思ってか、誰にも看病疲れをさせず、何も話してくれないままのあっけない最後でした。

又母は、とても楽天的な人で、私の主人亡き後も、私がくよくよ悩んでいると「人生成るようにしか成らないのだから」「ケ・セラ・セラ」よ。と…私をいつも励ましてくれ、随分助けられて参りましたのでこれから……と思ってましたのに、未だに「何で…」と悔しい気持ちで一杯です。

体には人一倍気をつけており、糖尿病を患ってましたが「体の中に子供を抱えているの」と言って意思が強く、自己管理をしっかりして、前向きに人生を楽しんでましたのに……今思えば院内感染もあったのでは……とよぎる事も……と姉弟で悔やんでおります。

何事も一生懸命で、趣味も多く常にマイペースで、器用で根気が良く又、想像力が抜群で独自のアイディアで図案を考え、押し花等は先生より上手で、日本画・俳画・俳句・デコバージュ・太極拳・お菓子作り等、大谷の叔母（母の妹）と「今の世に全盛の人だったらきっとマスコミに引っ張りだこね」と「こんなに早く天国に行くなんて、本人は考えていなかったでしょうね」と母亡き後、いつも話してます。

誰に対しても平等で、いつもニコニコと明るい母は、私たち姉弟の誇りです。一歳三ケ月で病死した弟（三男）の事をいつも案じてましたので、私たち姉弟は「天国でお父さんと渉（ワタル）ちゃんが待っているので幸せにネ」と言って天国へ送りました。

後年母の付き添いで「辰巳会」に参加させて頂き、何も知らなかった母の実家の「鈴木の事」や辰巳会のみなさんの功績等伺うことが出来、又、いろんな方にお目にかかることが出来、視野を広げさせて頂き、人は、みんなに支えられて生きていることを身にしみて感じました。

「サーちゃん・サーちゃん」とみんなに愛されていた母、これからも天国からニコニコと、みんなの幸せを見守って頂きたいと思います。

お母さん「愛をありがとう！」天国でも、し・あ・わ・せ・に・ね。